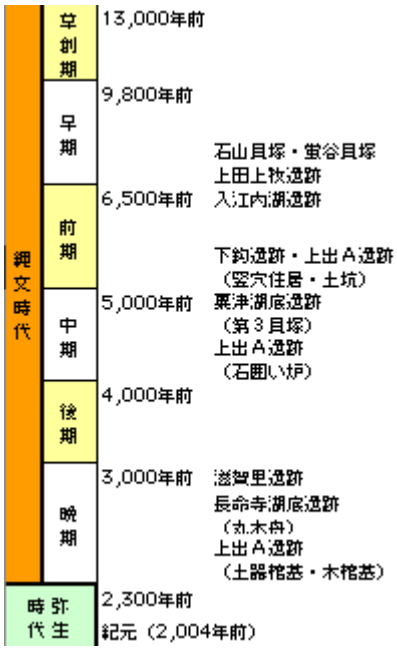
埋もれた文化財の話　25

琵琶湖の傍（かたわら）で暮らし始める
～滋賀県の縄文時代～

1．はじめに

滋賀県の縄文時代の様子については、近年発掘調査例も増え、次第に明らかになりつつあります。これまでに分かっていることを整理しながら、少し当時の様子に思いをめぐらせてみることにしましょう。



今回取り扱う遺跡の年表

2．住む

縄文時代の人々は、どのような「家」に住んでいたのでしょうか？これまでの調査･研究の成果からは、「竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）」と「平地式住居（へいちしきじゅうきょ）（掘立柱建物：ほったてばしらたてもの）」という、2種類の建物に暮らしていたのではないか、と考えられています。

「竪穴式住居」は、地面に円形あるいは方形の穴を掘り、その中に柱を建てて屋根をかけたもの、これに対して「平地式住居」は地面を掘りくぼめずに、地面に直接柱を建てて屋根をかけた建物だったと考えられています。内部の広さは様々ですが、竪穴式住居の場合では、円形のもので直径4m程（下写真）、方形のものでは一辺4～5m程、が当時の関西地方では比較的一般的な大きさだったようです。

上出A遺跡　竪穴式住居跡とそれを囲む土坑群
（前期後半：約 5,500 年前）

建物の中央付近には、「炉（ろ）」と呼ばれる、調理をしたり室内を暖めたりするための火を使う施設が設けられる場合があります。炉には、火を焚く部分（火床：ひどこ）を石で囲った「石囲い炉（いしがこいろ）」や、単に火床があるだけの場合（地床炉：じしょうろ）が見られます。

上出A遺跡　石囲い炉（中期末：約 4,300 年前）

住居の周りには、食べ物などを貯えたり（貯蔵穴：ちょぞうけつ）、ゴミを捨てたり（廃棄土坑：はいきどこう）するための施設（穴）が設けられてい

る場合もあるようです。また火を焚いた跡が見つかることもあります。

滋賀県内では、これらの住居は、縄文時代早期の終わり頃（約 6,800 年前頃：大津市上田上牧（かみたたかみまき）遺跡）からあったようですが、それ以前の様子も含めて、詳しいことはまだよく分かっていません。確実な例としては、前期後半頃（約 5,500 年前頃）のものが、栗東市の下鈎（しもまがり）遺跡や、近江八幡市と安土町にまたがる上出 A（かみでえい）遺跡などで見つかっています。この時期以降には、確実に滋賀県内での居住が始まっていたと言えそうです。

3．食べる

縄文時代の人々は、何を食べどんな生活を営んでいたのでしょうか？その様子は、「貝塚」と呼ばれる当時の「ゴミ捨て場」を調べることによって、次第に判明しつつあります。

粟津湖底遺跡第 3 貝塚（中期初頭：約 5,000 年前）

滋賀県では、琵琶湖の南端、琵琶湖から瀬田川に注ぎこむ辺りで、大

津市石山（いしやま）貝塚・蛍谷（ほたるだに）貝塚・粟津湖底（あわづこてい）遺跡などの、大規模な貝塚が見つかっています。特に粟津湖底遺跡では、貝塚が琵琶湖の底に沈んでいたために、様々なものが腐らずに当時の状態のままで残っていました。動物では、シカ・イノシシ・タヌキ・サルなど、琵琶湖で捕れるものではセタシジミやスッポン、フナなど、それからトチやイチイガシなどの木の実や、ヒシなど水辺の植物の実も見つかっています。

粟津湖底遺跡第3貝塚から見つかった獣骨（中期初頭：約5,000年前）
左上：イノシシ　右上：スッポン　下：シカ

これらのことから、動物や魚・貝を捕り、植物の実を採集して生活の糧（かて）にするという、「狩猟や採集」に支えられた生活を営んでいた、と考えられます。

4．使う

（1）丸木舟

滋賀県の縄文時代を特徴づけるものに、「丸木舟（まるきぶね）」があります。県内ではこれまでに30艘近く見つかっており、そのほとんどが琵琶湖の東～北岸の遺跡を中心に出土しています。

長命寺湖底遺跡で見つかった丸木舟（晩期：約 2,500 年前）

復原丸木舟の実験航海の成果によれば、一度に運べる荷物の量は300 kgとも言われています。しかし、底の浅い舟ですから、外洋のような大きい波の立つ所には不向きです。琵琶湖のような比較的波の穏やかな所でこそ、丸木舟の持つ機動力が活かされ、人や物の移動をより活発にしたものと思われます。当時の人々の交流や物資の流通を考える上で注目すべきものでしょう。

（2）日常の生活道具

縄文時代の人々は、この丸木舟のような「木を素材とする道具」＝木器を使って、日々の生活を営んでいたようです。木器は、通常の遺跡では腐食して無くなっていることが多いのですが、琵琶湖の湖底や湖岸周辺の遺跡の調査では、湖中（水中）にあったことで腐食を免れたものが多数見つかります。その中には下写真のような容器をはじめ、竪櫛（たてぐし）等の装飾（そうしょく）品など多くの漆塗（うるしぬり）製品があり、その技術力の高さには目を見張るものがあります。

入江内湖遺跡で見つかった朱漆塗りの木器（前期：6,500～6,000 年前）

この木以外にも、土や石、動物の骨など自然の素材を巧みに利用して、生活に必要な道具を作っていたことがわかっています。

発掘調査で最も多く見つかるのが、「土を素材とする器」＝土器です。土器の表面に「縄目のような模様（文様：もんよう）」が多く見られることから「縄文（じょうもん）土器」と呼ばれています。この縄文土器には、縄目文様以外にも、紐（ひも）状にした粘土を貼り付けたり、木の枝などを押し付けたり、あるいは手の指や爪も駆使して、様々な装飾を施したものもあります。

様々な形の土器（晩期：滋賀里遺跡）

土器の大きさは様々ですが、基本的には「深鉢（ふかばち）」と「浅鉢（あさばち）」という2種類の形のものがあり、深鉢は煮炊き、浅鉢は「ものを盛る」ための器ではないか、と考えられています。しかしどちらの形の土器にも、煮炊きなど火にかけた際に付く「スス」が、土器の表面に残っているものがあることから、両者は明確な使い分けをせず、状況に応じてより効果的な使い方を工夫していたのではないか、とも考えられます。

また、「石を素材とする道具」＝石器も重要な役割を持っていました。「狩猟や採集」活動に不可欠な、当時の生活を担った道具のひとつで

す。例えば、獣を捕らえる「狩り」に使う矢の先につけた「やじり（石鏃：せきぞく）」や、捕らえた獲物（えもの）を解体するためのナイフとも考えられている「石匙（いしさじ）」などがあります。あるいは、「採集」された木の実を磨（す）りつぶすための道具（「敲石（たたきいし）」や「磨石（すりいし）」・「石皿（いしざら）」）などもあります。

様々な形の石器（晩期：滋賀里遺跡）

5．葬（ほうむ）る

縄文時代の人々の埋葬（まいそう）方法は、より古い時期には棺（ひつぎ）も何もなく、単に地面に穴を掘り埋めただけのお墓（土坑墓：どこうぼ）が多かったようです。やがてそれに加えて、土器を棺にしたお墓（土器棺墓：どきかんぼ・甕棺墓：かめかんぼ）が見られるようになります。そして縄文時代の終わり頃（約 2,500 年前）になると、木製の棺に葬られる例（木棺墓：もっかんぼ）も見られるようになります。

墓穴や棺の中からは、極めて稀に耳飾りや玉類などの装飾品が見つかったり、ベンガラや水銀朱（すいぎんしゅ）などの「赤い顔料（がんりょ

う)」の混ざった砂が見つかることがあります。死者に対する思いがこめられたものでしょうか。

滋賀里遺跡　土坑墓の様子（晩期：約 3,000 年前）

土器棺墓に使われた土器（晩期：約 2,500 年前、上出A遺跡）

6．おわりに

縄文時代の人々は、こぢんまりとした家の中で火を囲み、自然の中に有るものを巧みに道具として使い、あるいは食べ物として上手く採り入れて暮らしていたのでしょう。時には少しだけ蓄え、時には臨機応変に「そこにあるもの」を工夫して大切に利用する、そんな暮らし方がそこにはありそうです。

今一度、私たちも身の回りを見渡してみませんか？少しだけ「工夫」のできそうな「そこにあるもの」が見つかるかも知れません。

今回取り扱った縄文時代遺跡の位置